

生き物が結ぶ、わが家のにぎわい

アマチユア養鯉家 守里廣一さん
もりさと ひろかず



幼稚園帰りの親子たちが川を泳ぐ大きなコイに大喜び

コイの泳ぐ水辺が地域の人たちを癒す



守里 廣一さん

小島町に住む守里廣一さんは、地域や子どもたちに喜んでもらおうと、里中の川でコイを飼育しています。養鯉が趣味の守里さんの自宅には、コイ、鳥、猫もいます。生き物に囲まれて暮らす守里さんのご家族を取材しました。

コイの泳ぐ里中の川 生命育む養鯉を趣味に

小島町を流れる里中の川の一角(約10m)で、体長70cmほどもある大きな真鯉や、美しい緋鯉など、約50匹のコイが悠然と泳いでいます。川のすぐ側の家に住む、アマチユア養鯉家の守里廣一さんが飼育しています。守里さんの自宅敷地には、古い浴槽などに工夫を加えた、繁殖用、稚魚用、幼魚用など養鯉

のための水槽があります。繁殖用の水槽には、卵を産み付けるための水草も入れてあります。水槽が過密にならないよう、何十万個も産み付けられた卵の一部を、自分で世話ができる分だけ、孵化させて育てます。しかし、小さな命は弱く、一生懸命に世話をしても、大きくなるのは1割か2割。大きくなったら川に移して飼育します。もちろん川でも病気や寄生虫などの心配もあり、気は抜けません。



コイ

一方で、そこから自然繁殖する事もあって、どんな色や模様のコイやキンギョが生まれるか、分からない事が楽しみの一つだそうです。守里さんは、世話をして繁殖させたコイやキンギョを人にあげたり、観賞して喜んでもらう事が大好きです。市役所の敷地にある池にもたくさん寄付していただきました。市役所では受付に餌を用意して、誰でも餌をあげられるようになっています。

まち並みの景観を守り「ミニミニティ」を作る

養鯉が趣味となったきっかけは、22年前に琵琶湖で釣り上げた、体長約30cmの1匹の真鯉でした。里中のきれいな小川を大きなコイが泳ぐ景観は、風情と



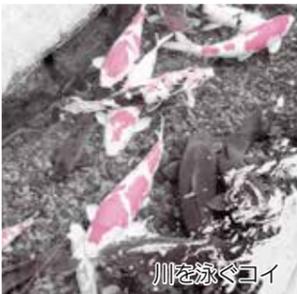
コイを見にきたご近所の人(手前)と守里さん



キンギョの水槽



繁殖用の水槽をのぞき込む守里さん



川を泳ぐコイ



守里さんご家族(左から浩一さん、廣一さん、和子さん)

家族4人、コイ50匹、オカメインコ13羽、ネコ2匹の大家族

生命力がありました。

奥様の友人から緋鯉を譲り受けるなどして川のコイが増えるのと、近くの河西幼稚園や小学校の子どもたちが登園校時に足を止めて見るようになりました。お年寄りが散歩の途中に足を止めて餌をあげる事も、赤ちゃんを抱いた母が笑顔で見ている事もありました。地域の人が折にふれてコイを眺めて楽しんでくれる姿を見ていた守里さんも嬉しくなって、コイやキンギョの飼育だけでなく、繁殖まで手掛けるようになったそうです。守里さんは「親子でコイを見に来てくれた人に私も声を掛けたりします。地域の子もたちは『コイのおっちゃん』と覚えてくれました。『近所には新しい住民も増えましたが、コイがコミュニケーションを作る助けになります』と話していました。



オカメインコ

生き物に囲まれ暮らし 家族の絆も育まれた

守里さんは、子どものころから生き物が大好きでした。養鯉に夢中になる前は、ニワトリ、ウズラ、セキセイインコなど鳥の飼育を楽しんでいたそうです。実は守里廣一さんと奥様の和子さんには「動物好き」「鳥好き」の共通点があります。和子さんは現在もオカメインコ13羽やサクラ文鳥、セキセイインコなどを飼育しています。ほかに、長男の浩一さんが、ずいぶん前に川に落ちていたところを保護した子猫や福井県に釣りに行って拾ってきた子猫も家族の一員になって、すっかり大きくなりました。次男の成二さんはマグロ釣りを趣味にしている、その道ではけっこう有名なのだとか。



ネコのクー

「家族全員が、なにせ生き物大好きですね。たくさん飼っているのが家族旅行にも行けなかったけれど、『今日はイン』が…』とか、振り返ると家族の会話には困らなかつたように思っています。廣一さんとご家族は笑っていました。廣一さんは、定年後に帰農して、現在は認定農家となり6万5千㎡の田んぼで米づくりをしています。浩一さんも農家を継いで、お父さんの手伝いをする傍ら、昨年からメロン農家となりました。守里さんは「動物も植物も、手をかけた分だけ応えてくれる生き物です。結局、生き物好きが仕事にもなっています」と話していました。



ネコのマロ

※平成15年から琵琶湖で釣った魚を他の水面に放流することは禁止されています。放流する場合はコイヘルペスウイルスが検出されていない証明が必要です。